



ニホンナシの新品種

～「はつまる」と「ほしあかり」～

都内におけるナシ生産は、多摩川沿岸の沖積土壌で生産される「多摩川梨」と、武蔵野台地上の洪積土壌で生産される「多摩湖梨」に大きく分けられます。直売所等で販売され、都民の皆様に喜ばれています。品種は東京ブランドの「稲城」に加え、「幸水、豊水、新高」が中心でしたが、消費嗜好の多様化に対応して、「あきづき」など新たな品種も増えています。そこで、2015年に国立研究開発法人農研機構果樹茶業研究部門により品種登録されたナシ新品種について、都内における特性を明らかにしたので紹介します。

「はつまる」（「筑水」×「筑波43号」）

7月中下旬収穫の極早生品種で、「幸水」と比較して糖度は同程度で、果肉は軟らかく、果実肥大は劣ります。花芽は安定して着生します。果肉にみつ症（果肉障害）が発生することがあります。

「ほしあかり」（「314-32」×「あきあかり」）

8月下旬～9月上旬収穫の中早生品種で、「幸水」と比較して糖度は同程度で、果実肥大に優れます。黒星病抵抗性を有していますが、果形の揃いが劣り、明瞭な溝が発生します（以上、図1・2）。

今後も、これらを含めた新品種について、特性の年次変動等を詳しく調査していきます。

（園芸技術科 果樹研究チーム）



図1 「はつまる」(左)と「ほしあかり」(右)の結実状況(写真提供：(国研)農研機構 果樹茶業研究部門)

7月		8月		9月		10月	
中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
はつまる			幸水		あきづき		
			ほしあかり				
			稲城				
			豊水		新高		

図2 東京都で生産されるナシの主要品種と新品種の収穫時期(立川市)

春夏期におけるマリーゴールド・フレンチ種のセルトレイ栽培の提案

マリーゴールド（キク科1年草）のうち、フレンチ種は草姿がコンパクトにまとまり、旺盛な生育を示すことから、セルトレイを用いた観賞性の高い商品の提案が期待できます。

そこで、市販フレンチ種のオレンジ色8品種を用い、50穴セルトレイに直蒔きする無移植栽培により、観賞性を評価しました。その結果、播種14日後には、全品種とも茎葉がセルトレイを覆い、マット状の緑素材となりました（図1）。このように、セルトレイで栽培することにより、短期間で育成が可能でした。開花状況は品種間差が大きく、早期からの連続開花や株の揃いなど商品性の点で「マーチ」が最も優れました（図2）。
（江戸川分場）



図1 播種14日後の「ボーイ」
撮影日：2015年6月16日



図2 播種44日後の「マーチ」
撮影日：2015年7月15日

少花粉スギ・ヒノキのコンテナ苗を育てています ～林業の低コスト化を目指して～

コンテナ苗は、コンテナと呼ばれる育苗用の容器で育てた苗木です。根鉢が形成されるため、露地圃場で育てた従来の苗木と比べ、植栽に不向きとされる夏や秋に植栽しても枯れにくいといった特徴があります。伐採・搬出後の植栽は、適期を選んで行われていましたが、コンテナ苗を利用すればこれらの作業を続けて行うことが可能となり、植栽にかかる費用を抑えることができます。

農総研では、林業の低コスト化が可能なコンテナ苗を普及させるため、少花粉スギ・ヒノキのコンテナ苗（図1）の育成技術の確立に取り組んでいます。今年5月には、スギやヒノキの苗木生産者の方々に向けたコンテナ苗の育苗講習会を開きました（図2）。大変興味を持って熱心に聞いていただき、生産現場ならではの様々な意見が寄せられました。

これらのご意見をふまえ、効率的な育苗方法等について研究を深め、普及に役立てていきます。

（緑化森林科 森林研究チーム）



図1 少花粉スギのコンテナ苗



図2 苗木生産者への講習会

トルコギキョウ「東京E1号」が 品種登録されました！

トルコギキョウは消費者の人气が高く、都内直売切花農家の関心も高い花き品目です。しかし、夏の暑い時期に種をまくと休眠して茎が伸びない状態（ロゼット）になり、商品性のある切り花の収穫が困難です。そこで、農総研では、突然変異育種法によりロゼット化しにくい品種の開発に取り組み、ロゼット化率が1割以下の弱ロゼット性品種「東京E1号」を育成し、2015年5月20日付けで品種登録しました（登録番号 第24321号）。また、品種登録に先立ち、東京都種苗会との取組みにより「東京E1号」を片親に持つF1品種の開発を進め、2011年に大輪の紫八重咲き品種「プラティニブルー」を育成しました。「プラティニブルー」はロゼットが少なく高温期にも栽培しやすい品種です。現在は他県での栽培が主ですが、今後は都内直売切り花農家への普及も期待されています。

（園芸技術科
バイテク研究チーム）



図1 「東京E1号」



図2 「プラティニブルー」

都内で新たに確認された害虫 「ミナミアオカメムシ」

刺激を与えると嫌な臭いを出すことで知られるカメムシは、農作物に深刻な被害を与える重要な農業害虫でもあります。カメムシは針状の口を差し込んで汁を吸うため、加害された作物は奇形になったり、刺し痕が黒く変色したりして、商品価値が著しく低下します。

東京都内では、これまではアオクサカメムシ、チャバネアオカメムシ、クサギカメムシなどが代表的な害虫でしたが、近年これらに加えてミナミアオカメムシの発生が警戒されています。本種は南方系の種で、1950年代には九州南部や四国南部でのみ発生が確認されていましたが、徐々に分布域が北上し、2010年には千葉県でも発生が報告されました。東京でも、従来、小笠原諸島や八丈島でのみ生息していたのが、2011年には大島、2015年に江東地域でも発生が確認されました。

ミナミアオカメムシは食性が広く、対象植物は145種に及ぶと言われています。今後も発生状況を注視し、本種による被害の回避に役立てていきます。（生産環境科 病害・虫害管理研究チーム）



図1 オクラに寄生する
ミナミアオカメムシの成虫



図2 ミナミアオカメムシ幼虫
（円内）とブロッコリーの被害

都内の施設土壌における塩類集積の実態

都内の農業生産では、施設栽培が年々増加する傾向にあります。施設栽培では露地栽培に比べて一定の気温が保たれることから、1年間に複数回作物を栽培することが可能です。さらに、風雨などの自然環境にも左右されず、安定した収穫が期待できます。一方で、作付けごとに肥料を投入するため、施設土壌では作物に吸収されなかった肥料分が蓄積する傾向にあります。過度に蓄積が進んだ結果、塩類が集積して作物生育が不良になる現象が都内各地で見られています（図1）。

そこで、施設土壌における塩類集積の実態を調査しました。その結果、施設土壌は露地に比べて塩類集積の度合いを示すEC値の高い地点が多いことを確認しました（図2）。さらに、塩類集積の主な要因は、硫酸イオンであることが判明しました。硫酸イオンは、化成肥料に含まれる副成分（主成分を安定させるために入っている成分）や、長期に渡って施用された家畜ふん堆肥に由来するものであると考えられます。このことから、塩類集積土壌の改善には、硫酸分を含まない肥料や植物質堆肥の投入が有効と期待されます。

同じ土壌で作物を作り続け、安定した収量や品質を得るためには、土壌の健康状態を考慮した肥料・堆肥の選択が重要です。農総研では、今後とも施設土壌の実態調査を継続し、健康な土壌状態を維持するための肥培管理について研究を進めていきます。（生産環境科 土壌肥料研究チーム）



図1 塩類集積により生育不良の見える施設コマツナ圃場

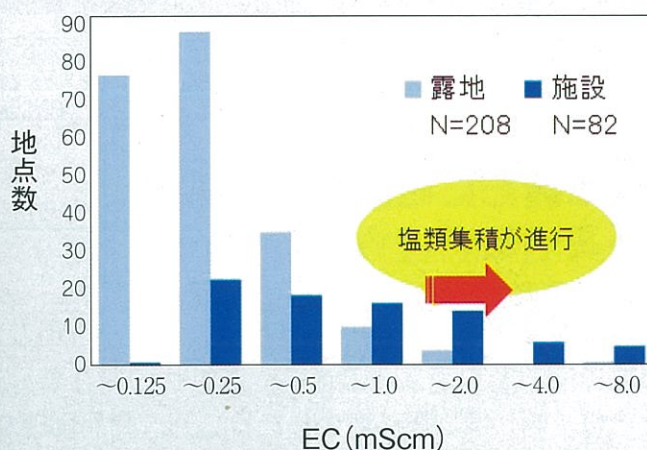


図2 都内畑土壌のEC(塩類集積度)

～平成28年度農業技術研修生の開講式を開催しました～

今年度も、都内の農業後継者8名（野菜専攻6名と果樹専攻2名）が、農業技術研修生として農総研に入所しました（図1）。

これから1年間、講義、実習、見学など研修を行い、それぞれのテーマに取り組みます。研修で得られた知識を活かして、将来の東京農業を担ってくれることを期待しています。



図1 開講式の様子

（発行者）東京都農林総合研究センター 望月龍也

公益財団法人 東京都農林水産振興財団 東京都農林総合研究センター

〒190-0013 東京都立川市富士見町 3-8-1 TEL 042-528-5216 FAX 042-523-4285

<http://www.tokyo-aff.or.jp/center/index.html> 皆様からのご意見・ご質問・ご要望をお待ちしております。